

創立50周年記念号

吹 鳴

SUIMEI

— 50年のあゆみ —

1957年(昭和32年)～2007年(平成19年)

富山県学校吹奏楽連盟

24

創立50周年記念号

吹 鳴

SUIMEI

— 50年のあゆみ —

1957年(昭和32年)～2007年(平成19年)

目 次

1. 巻頭言「記念誌の刊行にあたって」 富山県学校吹奏楽連盟会長	北 慎吾	1
2. あいさつ「創立50周年を迎えて」 富山県学校吹奏楽連盟理事長	伊尾 孝敏	1
3. 祝 辞		
富山県教育委員会教育長	東野 宗朗	2
(社)全日本吹奏楽連盟理事長	平松 久司	2
中部日本吹奏楽連盟理事長	山田 太	3
北陸吹奏楽連盟会長	土合 勝彦	3
富山県芸術文化協会会長	平田 純	4
北陸吹奏楽連盟理事長	松原 清	4
石川県吹奏楽連盟理事長	北村 善哉	5
福井県吹奏楽連盟理事長	植田 薫	5
朝日新聞社富山総局長	小原 洋	6
4. 思い出の富山県学校吹奏楽連盟		
富山県学校吹奏楽連盟顧問	薩摩 利夫	6
富山県学校吹奏楽連盟顧問	坪島 照信	7
富山県学校吹奏楽連盟顧問	中田 紀彦	7
富山県学校吹奏楽連盟名誉会員	加藤 淳	8
5. 思い出の吹鳴より		
富山県学校吹奏楽連盟名顧問	石上 英将	9

第 1 部

1. 富山県学校吹奏楽連盟50年の歩み	14
2. 富山県学校吹奏楽連盟歴代役員	58
3. 富山県学校吹奏楽連盟「顧問・参与・名誉会員・特別会員」名簿	80
4. 富山県学校吹奏楽連盟加盟団体名簿（平成19年度）	82
5. 富山県学校吹奏楽連盟規約、会計細則、会長・副会長および会員等の選出に関する内規、表彰規定	86
6. 創立50周年記念講演会・演奏会	94
7. 創立50周年記念表彰、平成19年度感謝表彰・平成19年度役員永年勤続表彰	98
8. 近年の活動より（1997年富山県学校吹奏楽連盟創立40周年以降）	
① 2000年とやま国体（第55回国民体育大会）	103
② 支部吹奏楽祭	111
③ アンサンブルコンテスト支部大会	115
④ 東日本学校吹奏楽大会	125
⑤ 西日本学校バンドフェスティバル	129
⑥ 中部日本吹奏楽連盟「管楽器個人・重奏コンテスト」	131
⑦ 吹奏楽スピリッツinとなみ野	132
⑧ 全日本高等学校選抜吹奏楽大会	136
⑨ 全日本高等学校吹奏楽大会in横浜	139
⑩ 全日本吹奏楽連盟特別演奏会	141
⑪ 上野の森バンドパーク	142
⑫ 国民文化祭	143

第 2 部

1. コンクール、コンテスト、演奏会の変遷（開催回数）	144
2. 全日本吹奏楽コンクール	148
• 全日本吹奏楽コンクールの変遷	
• 全日本吹奏楽コンクール課題曲一覧	
• 全日本吹奏楽コンクール富山県からの出場団体（第 8 回大会～第55回大会）	
• 北 陸吹奏楽コンクール富山県推薦団体の記録（第 1 回大会～第48回大会）	
• 富山県吹奏楽コンクール審査員一覧	
• 富山県吹奏楽コンクールの記録（第 1 回大会～第35回大会）	
3. 全日本マーチングコンテスト	260
• 全日本マーチングコンテスト富山県からの出場団体（第 1 回大会～第20回大会）	
• 北 陸マーチングコンテスト富山県推薦団体の記録（第 1 回大会～第20回大会）	
• 富山県マーチングコンテスト審査員一覧	
• 富山県マーチングコンテストの記録（第 1 回大会～第18回大会）	
4. 全日本アンサンブルコンテスト	296
• 全日本アンサンブルコンテスト富山県からの出場団体（第 1 回大会～第31回大会）	
• 北 陸アンサンブルコンテスト富山県推薦団体の記録（第 1 回大会～第31回大会）	
• 富山県アンサンブルコンテスト審査員一覧	
• 富山県アンサンブルコンテストの記録（第 1 回大会～第42回大会）	
5. 全日本小学校バンドフェスティバル	370
• 全日本小学校バンドフェスティバル富山県からの出場団体（第 1 回大会～第26回大会）	
• 北 陸小学校バンドフェスティバル富山県推薦団体の記録（第 1 回大会～第 9 回大会）	
6. 中部日本吹奏楽コンクール	380
• 中部日本吹奏楽連盟コンクール、コンテストの変遷	
• 中部日本吹奏楽コンクール課題曲一覧	
• 中部日本吹奏楽コンクール本大会富山県からの出場団体（第 1 回大会～第50回大会）	
• 富山県大会審査員一覧	
• 富山県大会の記録（第 1 回大会～第50回大会）	

あとがき



「記念誌の刊行にあたって」

富山県学校吹奏楽連盟会長 北 慎吾

富山県学校吹奏楽連盟創立50周年を記念して、関係各位の絶大なご支援・ご協力を賜り、ここに記念誌「富山県学校吹奏楽連盟50年のあゆみ」を刊行できますことは大変喜ばしく、心から感謝申し上げます。

昭和32年7月、吹奏楽及び管・打楽器による音楽の普及・向上を図り、富山県の芸術文化の発展と音楽教育の向上・発展に寄与することを目的に発足した当連盟も、歴代会長を始めとする会員各位の並々ならぬ努力と関係者の心温まるご支援により、今では、小・中・高・大・一般・職場の165団体が加入され、名実ともに本県を代表する音楽文化の拠点組織として、その活動は県内外から高い評価を受けるに至っております。

現在、各種コンテストやコンクールの円滑な運営に努める一方、一人一人の演奏技術向上に向けた取り組みも積極的に行っており、その一つに、県の助成を受けながら平成7年から継続して実施している「高校吹奏楽技術

指導講習会」があります。

中央で活躍される有名な演奏家をお招きし、直接部員に指導を頂く事業であります。プロの演奏家に正しい奏法や練習法を学び、素晴らしい音を直接聞きたいという強い要望を受け、一時期初心者と経験者に分かれた講習会を実施したこともありましたが、現在はリーダー養成に絞っています。各楽器の持つ特色ある音色に、演奏者の熱い思いを託し、団員みんなで音楽を創りあげるといふ13年間の成果は、演奏技術の向上とともに各種全国大会での入賞に結びついてきました。

一つの節目を迎えた富山県学校吹奏楽連盟ですが、明日に向けての第一歩となるこの記念誌の刊行をとおして、役員一同連盟の発展に一層努力する所存であります。

関係各位には、今後とも本連盟に対し、温かいご支援とご協力を賜りますようお願いを申しあげ、ご挨拶いたします。



「創立50周年を迎えて」

富山県学校吹奏楽連盟理事長 伊尾 孝敏

この度 富山県学校吹奏楽連盟は創立50周年を迎え、記念式典と祝賀会を催し、50年誌を発刊する運びとなりました。この慶事に対し関係各位と共に喜びたいと思います。

本連盟は昭和33年、富山国体の開会式で式典音楽を成功させるため、前年の昭和32年に発足いたしました。以来、多くのイベントに於いて活躍の場を広げて参りました。中でも、昭和51年の大山国体、平成6年のインターハイ、平成8年の国民文化祭、平成12年の富山国体（夏季、秋季、冬季）のファンファーレ隊や式典音楽隊として、行事を盛り上げたことは皆様の記憶にも残っていることと思います。

現在は加盟団体が165団体となっておりますが、発足当時は中学校と高等学校の吹奏楽部を中心に数団体から始まり、その後、多くの関係者の尽力によりまして、小学校、大学、職場、一般と拡大して参りました。これまで

の諸先輩方の情熱とたゆまぬ努力によって築きあげられたこの労苦に対し、改めて敬意を表します。

富山県の吹奏楽におけるレベルは大変高く、全国大会でも多くの団体が活躍をして参りました。今後もこのレベルを維持しつつ、新しいことに連盟として取り組んで参りたいと思います。コンクール等で競い合うことも大切ですが、多くの団体が気軽に参加し、大勢の観客の皆様楽しんでもらえるような演奏会や催し物を企画し、地域と一体になった活動を推進していきたいと考えております。

終わりに、ここまで当連盟を育てていただきました県内外の方々や諸先輩に深く御礼申し上げますと共に、ご支援とご協力を賜りました関係各位に感謝を申し上げ、あいさついたします。



富山県教育委員会教育長 東野 宗朗

富山県学校吹奏楽連盟が、本県で最初の国体開催を翌年に控えた昭和32年に、中学校、高等学校の吹奏楽部35団体によって組織されてから50年の記念すべき年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。

貴連盟は、吹奏楽および管・打楽器による音楽の普及・向上を図り、富山県の芸術文化と音楽教育の発展に寄与することを目的として掲げ結成されたとお聞きしておりますが、コンクールの開催や演奏会、講習会など様々な事業に熱心かつ献身的に取り組まれ、本県吹奏楽のレベルの向上、音楽教育の発展に努めてられました。それにともなって今日では、小学校から大学、さらに職場等で結成された団体まで、165団体が加盟する組織に大きく成長を遂げられましたことに深い敬意を表します。

「全日本吹奏楽コンクール」「全日本小学校バンドフェスティバル」「全日本マーチングコンテスト」をはじめとした全国大会には、これまでも多くの加盟団体が出場され、毎年優秀な成績を収められているなど、本県の吹

奏楽に対して高い評価が定着しておりますことは誠に喜ばしい限りであります。

また、昨年5月の「県民のスポーツ大会合同総合開会式」ほか本県で開催されます多くの大会において、式典音楽が加盟団体によって立派に演奏されるなど、本県の芸術文化活動にとって大きな役割を担ってられました。

本県では、「人が輝く元氣とやま」づくりを目標とし、芸術文化活動について、県民誰もが幅広く親しみ、身近な活動に参加できること、さらに、世界に誇れる芸術文化の創造・発信することを目指しており、これまで以上に貴連盟の取り組みに期待が寄せられるところでございます。

貴連盟が半世紀にわたって築きあげてられました礎を基として、今後ますますの発展を遂げられますことを心より祈念いたしますとともに、本県の芸術文化の振興と発展に一層のお力添えを賜いますことをお願いいたします。お祝いのことばといたします。



(社) 全日本吹奏楽連盟理事長 平松 久司

富山県吹奏楽連盟の皆様、創立50周年をお迎えになりましたこと誠におめでとうございます。

貴連盟は、昭和32年7月、先輩諸先生方のご努力によって、中学校24団体、高校11団体によって結成されました。

ちょうどその翌年には、富山国体をひかえ連盟をあげての取り組みによって見事な演奏のもと大成功をおさめられたとうかがっております。

その大同団結がその後の貴連盟の発展への大きな推進力となり、着々と現在の強固な組織の基盤が確立されていったものだと思います。また北陸各県との協調により北陸吹奏楽連盟の一翼を担ってのご活躍はとても喜ばしいことでもあります。

また貴連盟では、歴代の理事長、役員の方々を中心として、絶えず講習会や演奏活動を通じて熱心な研修活動がすすめられており、その中から優秀な指導者や演奏団体も多く輩出されていますことは誠にご同慶に存じます。

このような元気な貴連盟の皆様が、私共全日本吹奏楽

連盟に対しましても、いつも温かいご理解とご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。

ご承知の通り、近年吹奏楽に対する関心が多くの方々の中に高まりつつありますが、貴連盟、加盟団体の皆様においても同様のことと存じます。それは皆様方が日頃のご努力によって演奏技術や表現力の向上はもとよりですが、何よりも皆様方が人を愛し、音楽を愛する熱い思いが多くの方々へ共感を呼びよせていることだろうと思います。そしてその心を込めた美しい音楽が、地域の人達にこよなく愛され、その心の輪が楽しく広がっているのだと確信するとともに、とても嬉しいことだと思っています。

貴連盟50年の歩みの中から皆様で構築された輝かしい歴史をふまえて、これからも伊尾理事長を先頭に、明るく夢のある吹奏楽活動を目指してください。益々のご発展を祈念しつつお祝いのことばとさせていただきます。



中部日本吹奏楽連盟理事長 山田 太

記念すべき50周年をお迎えになり、誠におめでとうございます。創立以来研鑽と努力を重ね今日まで取り組んでこられた皆様方に、心から敬意を表します。一口に50年といっても長い道のりであり、日々の積み重ねが今日の素晴らしい貴連盟を齎したものだと思います。

貴吹奏楽連盟は、中部日本吹奏楽連盟を支える大きな力となっております。貴吹奏楽連盟の活動が即ちわが連盟の活動であり、各支部が地域に根ざした積極的な活動を展開されることが、即ち私共中部日本吹奏楽連盟の大きな力であり誇りであります。

貴吹奏楽連盟が素晴らしい発展を続けて来られたスピリットには、あの「越中富山の薬売」の精神が脈々と燃え続けているからではないでしょうか。「越中富山の薬売」は全国を股にかけ、自転車で各戸を回り、四角い風船で子供達に人気を博していました。

この不撓不屈・進取の気性が、その底流を力強く支えているからだと思います。かつてJBAのある海外コン

ベンションの時に、貴吹奏楽連盟に属する団体が随行し、朝、ホテルの前庭で演奏やドリルを大空に響けとばかりに高らかに披露されていたことが今も印象に残っています。

どうかこれからも吹奏楽を通じ、心豊かな人格の育成に努められますと共に、地域に音楽の美しい花の数々を咲かせて頂きますことを心よりお祈り致します。そして、世界中に平和を奏する音楽が満ち満ちて止まないことを期待致します。

終わりに、貴吹奏楽連盟がこの輝く50周年をステップとして、いよいよ飛躍されますことを心よりお祈り申し上げ、御祝いのことばと致します。



北陸吹奏楽連盟会長 土合 勝彦 富山県学校吹奏楽連盟第5代理事長

このたび、富山県学校吹奏楽連盟が創立50周年を迎えられましたことを、心からお祝い申し上げます。

北陸吹奏楽連盟はご承知の通り、3県連盟で結ばれている仲の良い連盟であります。その中であって、中心的な役割を果たしていただいている富山県学校吹奏楽連盟が、めでたく50周年という意義ある年を迎えられたことは、北陸吹奏楽連盟としても誇らしいことでございます。

私的なことになり恐縮ですが、私が吹奏楽に関わらせていただいたのが昭和41年、その時の理事長が石上英将先生でした。駆け出しの私にとっては、遠い大きな存在でした。その後、先生のアドバイスで、全日本吹奏楽コンクール22回出場、全日本マーチングコンテストや全日本アンサンブルにも数多く出演させていただきました。国際交流ではアメリカ、イギリス、オーストリア等9カ国訪問することができました。また、連盟の行事としては平成6年のインターハイ、平成12年の2000年国体での指導や指揮をさせていただくなど、私の生涯における吹奏楽生活は、この吹連に大いなる母体として育てていた

だきました。

ひと口に50周年と申しましても、産みの役をお務めいただいた先輩各位のご労苦、そして、育てのご努力を積み重ねられた歴代役員の方々に心から深く敬意を表すものでございます。

富山県学校吹奏楽連盟は50年の歳月の間、いつの時代でも、目的をもった情熱と行動性をもつ人々たちによって、吹奏楽活動の本来あるべき典型の姿を見せてくれました。その旺盛な活動は“隆盛”の語に値しますが、それは、伝統の創造的な継承と、それを超えて新しいものを生み出そうとする両側面の統一の結果であると思います。

吹奏楽活動は、これからも生涯学習の場として、市民社会の生活の中での生きた文化として定着することを願うものです。

富山県学校吹奏楽連盟が、さらに発展、飛躍されますことを心より念じて、お祝いのことばとさせていただきます。



富山県芸術文化協会会長 平田 純

学校教育の目標は、教室での授業とクラブなどの課外活動を通して行われる、知識の習得、健康と体力の養成、情操の涵養、社会性の訓練といったところに要約されるでしょう。全人教育としての基礎的力を養うとともに、個人の嗜好、興味を助成するクラブ活動が必須とされているのもさもありなんと思えるのであります。

富山県学校吹奏楽連盟所属の小・中・高・大学・職場・一般併せて165を数える団体のブラスバンドは、晴天の元、整然とした隊列によるマーチング・ドリルで、元気を鼓吹する唳々たる楽の音を響かせたり、また、フルバンドではハートに染み入る演奏を披露されたりして、人々に感動と喜びを引き起こして、この50年に渡る切磋琢磨を通して培ってこられた成果は、数多くの県内外のコンクールで挙げられた金星として、燦然として輝いています。

海外での活動としては、富山県芸術文化協会が友好提携しているハンガリーのフラワーカーニバルで、1997年に吉江中学、続いて99年に富山商業高校、2005年ムジカグラート氷見が参加して第1位の栄冠を勝ち得たこと、また、2001年の高岡商業高校吹奏楽部がイタリア・サン・レモ国際フラワー・フェスティバルで断然第1位に輝いたことがわたしたちの記憶に鮮やかです。

教育の場では、メンバーが毎年替わり、指導者もまた替わることがあるというハンディキャップを克服しながら、高いレベルの音楽性を保ってきておられる現実に、深い敬意を表するものであります。最後に、指導者諸兄弟に深甚なる敬意を表し、併せて名誉ある伝統の保持と貴連盟の限りない発展を衷心からお祈り致します。



北陸吹奏楽連盟理事長 松原 清

このたび富山県学校吹奏楽連盟が創立50周年を迎えられましたことを心からお慶び申し上げます。

富山県の吹奏楽活動は昭和10年ころから中学校、高等学校、職場団体にも見られますが、昭和32年7月全日本吹奏楽連盟より広岡淑生氏をお迎えして中学校24団体、高等学校11団体で連盟が結成され、11月には山本正人氏指揮東京藝術大学吹奏楽部演奏会が開催されています。

以来、全日本吹奏楽コンクールへは、富山商業高等学校、高岡商業高等学校が20回を超える出場回数を誇り、常に北陸の中心バンドとして各加盟団体の目標となってきました。また、平成になってからは戸出、牧野、芳野、吉江の各中学校の活動も盛んになってきます。コンクールだけでなくマーチング、アンサンブルコンテスト、小学校バンドの育成、海外交流と吹奏楽活動全般にわたっての貴連盟の活動は全国的にも誇れるものであると思います。

北陸吹奏楽連盟には橋谷、石上、坪島、薩摩、土合各

先生方が理事長としてご尽力いただき、30周年、40周年の記念式典、東海吹奏楽連盟との交流も富山県で、お世話になりました。北陸吹奏楽連盟の50年近い歴史の中でそのほとんどを富山県学校吹奏楽連盟の皆様方が中心となり、運営されてきたことにここで改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

さて、近年児童生徒数の減少や町村合併に伴い吹奏楽部の中でも部員数の多い学校と少ない学校の差が目立ち始めています。また、ゆとり教育の見直しや新たな制度の導入により部活動の時間が制約されています。そのような中で、私たちは吹奏楽に取り組む児童生徒たちが音楽を楽しみ、今後も健全な青少年として育ててくれることを願い活動を展開していかなければならないと思います。

この50年間にわたる貴連盟のすばらしい活動がさらに発展、継承されることを祈念しお祝いとさせていただきます。



石川県吹奏楽連盟理事長 北村 善哉

富山県学校吹奏楽連盟が創立50周年を迎えるにあたり、心よりお祝い申し上げます。貴連盟は昭和32年に、吹奏楽の普及向上と音楽文化の発展、情操の陶冶を目的として県内の高校11校、中学校24校、計35団体の加盟によって創立されました。その当時、特に北陸においては、どの県も楽器は満足になく指導する人材も少なかったと思われる中で、志を高く掲げその意気込みを北陸のみならず全国に向けて発信し始めたことは、ただただ驚嘆するばかりです。富山県勢が全国的な大会において良い成績を納め意気を示し、石川県・福井県に対しても北陸三県のみならずの重要性を主張され、友好と信頼感を持ち合う現在の北陸吹奏楽連盟を築き上げた原動力となり、私たちの模範的存在でありました。一言に50年と申しましても、そこには貴連盟の先生方の並々ならぬご努力と指導者の皆様方の吹奏楽への深い愛情があったからこそと、心から敬意を表したいと思います。

さて、昨今少子化という波の中で吹奏楽部員が減少し活動予算が削減されたり、あるいは学校現場の多忙化に

より練習や活動時間が短縮されたりして、一時期より吹奏楽の活動が難しいものになってまいりました。また公的音楽ホールなどの民営化や、連盟の活動が税金対策に追われるなど、社会においても吹奏楽活動への支援の舵取りが難しくなってきたのではないのでしょうか。しかし、先生方の吹奏楽にかける情熱は少しも衰えるところを知らず、奮闘される先生方の様子がテレビなどのメディアに大きく取り上げられる機会が多くなり、世の中での吹奏楽の認知度や人気は逆に上がってきております。このように吹奏楽が今や生涯教育として職場や地域との結びつきを深めたり、社会教育の場面でもその効果を大いに期待されており、吹奏楽連盟の活動が社会にとってより意義深いものになるよう祈念しております。

この50周年を機に貴連盟がますます発展され、北陸における吹奏楽の牽引者としてさらに高みを増していけますように、関係の皆様方の一層のご活躍を期待してお祝いの言葉とさせていただきます。



福井県吹奏楽連盟理事長 植田 薫

富山県学校吹奏楽連盟の創立50周年を、福井県吹奏楽連盟の全加盟団体とともに、心からお慶び申し上げます。同時に、これまで連盟の発展にご尽力いただいた役員の皆様、加盟各団体の歴代指導者・部員の皆様に敬意を表したいと存じます。

我々福井県吹奏楽連盟は、貴連盟の2年後に創立いたしましたので、様々な活動において、常に富山県をお手本とし、目標としてきたと言っても過言ではありません。北陸吹奏楽連盟の中でも、貴連盟は常にリーダーシップを取り、北陸のみならず日本のトップの連盟として活躍されてきました。各団体の演奏についても同様で、私自身、中学・高校時代に北陸大会などで目の当たりにした富山県各校のすばらしい演奏は、今も脳裏に焼き付いています。吹奏楽を指導する立場になってからも、富山県の団体は常にライバルであり目標であります。折しもこ

の3月にも、当県吹奏楽連盟の指導者講習会として、福光中学校と富山商業高等学校の練習風景を見学させていただき、改めてたくさんのことを学ぶことができました。

近年、テレビや映画で盛んに吹奏楽がとり上げられ、世間の注目度もいっそう高まりつつあります。一方、生涯教育、心の教育が叫ばれて久しく、音楽を通して人間形成を目指す吹奏楽の活動は、今こそこの日本に必要とされるものと言えます。富山県学校吹奏楽連盟はその役目を確実に果たし得ると確信しております。

どうかこれからも、北陸かつ日本のトップとしてますますご発展を続けられること、同じ北陸で吹奏楽を愛する仲間として福井県吹奏楽連盟との友好の絆がいっそう深まることを祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。



朝日新聞社富山総局長 小原 洋

富山県学校吹奏楽連盟がこのたび、発足50周年を迎えられるとのこと、ともに「全日本吹奏楽コンクール」を始めとする各種の吹奏楽関連の県大会を主催する「同志」としての立場から、心よりお喜び申し上げます。

前述の全日本吹奏楽コンクールは、加盟団体約1万4千という日本の吹奏楽界最大の組織による中心的な催しです。全国で約1万団体が参加し、いわゆる競技人口は30万人にもなる音楽の一大イベントで、特に、中学・高校の会場である東京の普門館は、「吹奏楽の甲子園」と呼ばれ、全国の子どもの夢の舞台として、あまりにも有名です。このほかにも、「見せる音楽」として人気の「全日本マーチングコンテスト」や、小学校のときからコンテストに参加する「全日本小学校バンドフェスティバル」などと、連盟と朝日新聞が二人三脚で運営している音楽のイベントは、いずれの分野でも日本一の全国大会となっております。

富山勢は昨秋、大阪で開催されたマーチングコンテスト、小学校バンドフェスティバルで計4団体の北陸代表

の座を独占。吹奏楽コンクールでは近年、富山商と高岡商の競り合いが光っております。

こうした県勢の活躍の裏舞台では、連盟役員を始めとする関係者の皆様のご苦勞、そして実際に舞台に立つ演奏者の熱意や日ごろの鍛錬はもちろんのこと、厳しい練習を指導される先生がた、大会の運営を担当される係の皆様、演奏者の周りのご家族などの支えや応援、演奏会場を訪れて熱演に耳を傾けてくださるお客様など、実に多くの地域の方々がかかわって、支え合い、県代表を全国大会に送り上げているのです。

吹奏楽コンクールなどと同様、朝日新聞社の主催行事では他に、日本の夏の風物詩・全国高校野球選手権大会があり、これが今夏、90回記念大会を迎えます。吹奏楽は、この高校野球を盛り上げていただくのに欠かせぬ存在でもあります。富山総局といたしましても、連盟50周年を機に、紙面でも「富山の吹奏楽」の熱気を改めて伝えていく考えです。そうした節目の年を迎え、改めまして、心を込めて50周年おめでとうございます。

思い出の富山県学校吹奏楽連盟



吹連活動を顧みて

富山県学校吹奏楽連盟顧問 薩摩 利夫 富山県学校吹奏楽連盟第3代理事長

富山県学校吹奏楽連盟には創立以来、吹奏楽活動を積極的に推進され、このたび、めでたく50周年を迎えられましたことは誠に喜ばしく、心からお祝い申し上げます。

また、これまでの半世紀にわたる足跡を振り返られるとともに、将来の発展のよすがとされるため、記念誌「吹鳴」を発刊されますことは、誠に意義深く、心から敬意を表します。

さて、ご承知のように、富山県学校吹奏楽連盟は富山国体開催の前年に他県に先駆けて創設され、多くの試練をのりこえ、今日の隆盛を迎えたわけであります。

本連盟の歴史は、その2年後北陸吹奏楽連盟の結成を図るなど、当初から、県内のみならず全国的視野に立った活動でありました。その間に、連盟の充実とレベルの向上、そして吹奏楽人口の増加を目標に、各種コンクール、指導者研修会、実技講習会の開催を始め、各種演奏会、作曲・編曲の募集を行うなど、試行錯誤の繰り返しでありました。時が流れ、連盟の充実とともに、夢が国内にとどまることなく、海外へとふくらんでいきました。富山県高校選抜吹奏楽団がフィリピン親善演奏旅行を手

始めに、韓国、台湾、シンガポール、タイ、中国、香港、スイス、フランス、メキシコ、アメリカ各国との国際親善演奏会に参加し、風俗・習慣の違いを越えて人間相互の触れ合いを持つという大変貴重な体験ができたと思っております。特にタイ国での演奏会では、2万人もの大聴衆のまえで演奏し、鳴り止まぬ拍手とブラボーの連発を浴びたのも、つい昨日のように思えてなりません。

このたびの記念誌刊行に際し、創立以来の歴史の足跡をたどり、更に将来に想いをいたすとき、連盟の果たすべき役割の大きさに身が締まる思いがいたします。

本日、ここに富山県学校吹奏楽連盟創立50周年記念式典を盛大に迎えることができたのも、偏に先輩諸氏のご尽力、会員各位の懸命の努力と関係各位の温かいご支援の賜物であり、あらためて心からお礼申し上げます。

どうか、この記念すべき50周年を節目とし、今後、更なる発展を遂げられることを切に願うものであります。



心のふるさと

日本高等学校吹奏楽連盟副会長
富山県学校吹奏楽連盟顧問 坪島 照信

昭和32年7月、県学校吹奏楽連盟の設立総会は、新装された旧富山市公会堂で開かれました。その頃は33年の富山国体に向けて連盟一同猛練習の最中でした。亡き橋谷、石上両理事長はこの連盟のためご活躍しておられ、私もその下で随分お世話になりました。

昭和33年の国体開会式が華で、350名のこの吹連編成の中、高校生吹奏楽団が大活躍しました。特に入場行進が整然としていたので、大会は大好評でした。

昭和35年11月、富山商業高校は、全日本吹奏楽コンクールに初出場いたしました。大阪フェスティバルホールです。自由曲は「聖堂の燭台」（カール・フランカイザー作曲）を演奏しました。結果は5位。いかに全国に強いバンドがあるかということをお思い知らされました。このころの常勝校は天理高校。けた外れのバンドでしたが、いい目標ができたと思いました。

強豪の存在が刺激になり、吹奏楽に情熱を燃やしまし

た。日夜生徒と共に苦労しましたが、6年間程入賞できませんでした。

昭和41年の全日本吹奏楽コンクールで全国3位になりました。日本海側は低調といわれていた高校生バンドが、短期間で全国トップレベルにまで駆け上がったことで全国から注目されました。

昭和58年の全日本コンクールで、高岡商業高校と富山商業高校の2校が初めて同時に金賞に輝きました。富山の高校生バンドのレベルの高さが広く知れ渡りました。土合勝彦先生の最高の笑顔が忘れられません。

この連盟の30周年記念功労表彰にすばらしいアタッシュケース（旅行カバン）を頂きましたが、その時の中田紀彦理事長にいつも心から御礼を申し上げます。これまで心温かい先生方が多く、私にとっては「心のふるさと」だと感謝しております。吹連の50年を迎えて更なる発展を本当に心から祈っております。



“30周年と50周年”

富山県学校吹奏楽連盟顧問
富山県学校吹奏楽連盟第4代理事長 中田 紀彦

私が富山県学校吹奏楽連盟に顔を出し始めたのは昭和40年過ぎだったろうと思う。昭和31年に富山高校で吹奏楽部へ入部、38年に婦負農業高（現富山西高）、40年に富山東高へ赴任し、吹奏楽部の創設や定演の開始など吹奏楽に熱中し始めた頃だと思う。連盟が出来て10年過ぎ位で、ベテランも若手も皆一緒になって、各バンドの指導や育成に汗をかいていた。各校実力をつけ、県選抜バンドを編成して台湾・フィリピン・シンガポール・中国など海外交流が始まったのが50年代である。生徒自身が自分達で活動をコントロール出来るようになった点で一段の進捗が感じられた。

昭和62年、理事長として連盟創立30周年を迎え、諸行事の運営と記念誌“吹鳴 30年のあゆみ”を編纂したことが、つい昨日のようにも思われる。30年の歴史を写真や寄稿等で集大成できたのは当時の仲間の努力、協力によるもので、改めて感謝する次第。記念講演では、秋山紀夫氏を迎え“日本の吹奏楽の歩みと今後の方向”とい

う演題で多くの具体的教えを受けたことを思い出す。又特別寄稿として私の高校時代の恩師であり、当時吹連の顧問であった石上英将先生（平成19年4月逝去）の「私の吹奏楽観」という今読んでも恐ろしい程の吹奏楽に対する執念と努力に圧倒される一文がある。是非一度読んでいただきたいものである。以来20年、今回創立50周年を迎えられたことに対し、心からお祝いを申し上げますと共に、更なる研鑽、努力を続けられますことを祈ります。

終わりに、最近目にした一文を記載し、責を果たしたい。

“吹奏楽とは、自分が楽器と向き合い、他人と言葉以外のことで会話をし、力を合わせて創り上げ、そしてはかなく美しく過ぎ去ってしまう、一瞬の芸術なのだ。”

（一音入魂「全日本吹奏楽コンクール 名曲・名演50」河出書房）



吹奏楽と歩いた半世紀

富山県学校吹奏楽連盟名誉会員 加藤 淳

子供が好きで教員を目指した私は、運もあって定年になるまで教員を26年間と行政に11年間携わらせていただいた。その延長としてさらに美術館に8年近くも関わらせていただいている。これもひとえに素晴らしい諸先輩や同僚、後輩に恵まれたお陰と感謝している。

私と吹奏楽との出会いは中学2年に始まる。中学・高校と吹奏楽部に入り、大学では管弦楽部に所属した。一貫してトロンボーンを担当し、昭和33年の夏季・秋季富山国体ファンファーレを演奏し、大学時代には新潟交響楽団から「未完成」演奏の客演として招かれ、昭和51年の冬季おおよま国体では吹奏楽隊の指揮をさせていただいたりした。

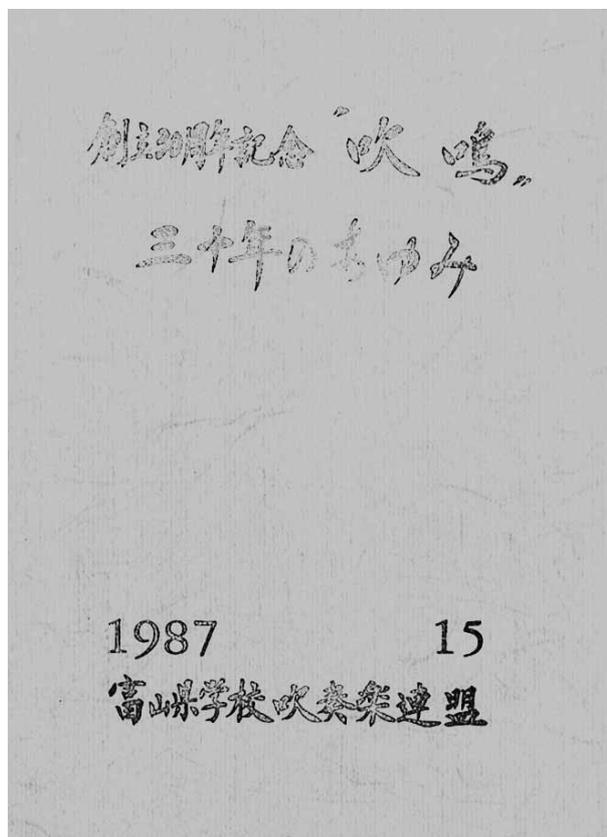
新卒教員として赴任した小杉高校以来、県教育委員会へ入るまでの22年間は学校吹奏楽連盟と共に歩いた。中でも生徒と各種コンクールに挑戦し感動を分かち合った思い出は、何ものにも代えがたい財産である。国語が専門で音楽センスもなく生徒達には随分と迷惑をかけたと

今も思っている。県大会での金賞は無論、アンサンブル全国大会や全日本吹奏楽コンクール北陸大会へ駒を進めたこと、海外公演に生徒と出かけたことなどはせめてもの慰みである。吹奏楽連盟では常任理事、代表理事、事務局会計、事務局長、副理事長の役を担った。連盟財政の健全化を図るためのポピュラー・コンサートの開催や県営陸上競技場での吹奏楽祭、さらには富山市内パレードの思い出など枚挙に暇がない。

県教育委員会では芸術文化を、富山県水墨美術館の開設準備をそれぞれ担当し、これまで美術館長、顧問と務めさせていただいているのも吹奏楽に関わった延長線上にある。ロシアのムソルグスキーは親友の画家ハルトマンの遺作展の印象をピアノ曲「展覧会の絵」として残し、フランスのドビュッシーは葛飾北斎の「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」に触発されて交響詩「海」を作曲したことなど音楽と絵画は無縁ではないようだ。



富山県学校吹奏楽連盟創立20周年記念「吹鳴」8号
昭和53年7月発行



富山県学校吹奏楽連盟創立30周年記念「吹鳴」15号
昭和62年10月発行



私の吹奏楽観（30周年記念誌より）

富山県学校吹奏楽連盟名顧問
富山県学校吹奏楽連盟第2代理事長 石上 英将
(H19.4 逝去)

◇はじめに◇

“吹奏楽の現状と展望”という題でこの度事務局より執筆依頼をうけた。吹奏楽については日頃何かと問題点を感じている私ではあるが、改めて書くとなると何となく億劫でつい延び延びになっていたのであるが、編集者の御熱意にほだされ、原稿も切りぎりになりになって急に書くことになった。従ってまとまりも悪く焦点のぼやけた発表になった事を何卒お許し願いたい。

さて、いただいた題材を基にまとめようとしたが、率直に述べようとすると問題点のみが眼にうかんで誠に味気ない事になりそうなので、思い切って私の日頃抱えている吹奏楽に対する見方や考え方をひれきし大方の御批判を仰ぐと共に、依頼の責めに替える事にした。従ってこれから縷々述べる事は、一人のややひねくれた吹奏楽愛好者の世迷い言とでも御理解下さって御笑読賜れば望外の幸せと心得ている次第である。

1. 吹奏楽に対する問題意識

私と吹奏楽の出会いには遠く中学生時代にさかのぼる。戦前母校の県立富山中学校（現在の富山高校）に入学した私は、音楽好きの為、当時ハーモニカバンドであった音楽部に入り部活動をつづけたが、4年生の時全面的に吹奏楽バンドに編成変えになり小太鼓を受け持たされたのがそのきっかけとなった。以来約40年にわたり私は吹奏楽のとりことなり、人生の大部分をこれに打ち込んだのであるが、生来あいまいさが嫌いな私にはこの吹奏楽という怪物は誠に格好な攻撃目標であって、数多い試行錯誤の連続の末漸く辿りついたのが音楽的な理解無くして吹奏楽の真の理解はあり得ないという認識であり、高度な理解には音楽的なさとりと繊細な感覚の醸成が絶対不可欠であるとの結論であった。

さてこの様な意識づけの進展と共に吹奏楽の演奏を通して耳についたのは、吹奏楽の非音楽的ともいえる表現の低さと、吹奏楽者の音の構成に対する無頓着ともいえる体質であった。この現実に対する疑問は、昭和30年代よりコンクールなどを通して中央との接触が行なわれるようになっても一向に氷解せず、コンクール審査の観点や権威筋の演奏を通じてみても、私にとって特に満足すべき多くをもたらさなかった。私は当初吹奏楽の演奏においては、何が表現出来るのか、吹奏楽でなければならぬものは何なのかという最も素朴な疑問にぶち当たり、その結論としてマーチの価値を認めマーチを手がけマーチの演奏表現に力を注いだ（昭和20年代）が、次第にこれだけが吹奏楽の表現範囲だろうかという物足りなさにおそろわれ序曲やワルツなどを手がけてはみたものの、結果は吹奏楽の限界をいやという程思い知る事のみで連続であった。この様な低迷を何年さまよった事か、どうとも抜き難い壁を前にして途方にくれていた折、たまたま30何年だったか、ギャルド吹奏楽団の生演奏をきく機会に恵まれたことは私にとって青天のへきれきであったと同時に吹奏楽に対する無限の可能性を信じさせてくれる大きな転機となったのである。今までは吹奏楽といえば一様なうおいに乏しい表現しか出来ないものだと思っていたが、ギャルドの演奏は吹奏楽でも多様な芸術性の高い表現が可能である事を示唆してくれたもので、殊に音に対する多様で変化に富んだ構成の数々は一様な音しか出ないものと思っていた私にとっては正に天からの副音とも思えるものであった。それ以来私は吹奏楽で何が表現出来るのかという大きな心の支えに楽しくもきびしい吹奏楽への追求に満腔の喜びを感じつつ突き進むことになるが、周囲の意識や目標は私とはかなりかけ離れていた為、私の道楽的な仕事として独りで手がける事にした。

2. 音への傾斜

吹奏楽の表現は決して硬直な一様なものではない……と信じた私は、先ず既存の吹奏楽の持つ音の壁を破る事へと挑戦していくが、その事は私の理想とする音の発見であり、ひいてはそれの様な音を出し得る技術の追求へ進むという宿命を担っており、正直いって仲々手本にする実例が見当たらず、また実験しようにもプレイヤーでもない私には学校バンドにおいて試みる手段しかなく、その前途は多難を極めた。然し根が理科教師である私はこの解明には私自身が真からさること、手段としては仮説と事実検証が最も有力であるとの認識があったので、多くの試行をくり返しおぼたらしい失敗の経験を通して漸くつかんだのは音に対する感覚であった。

それは音には大別して2種類あって、1つは強い張った陽性の音であり、もう一つは柔らかいふくよかな陰性の音で、音楽上の細かい表現はこれらの音の組合せや配合でできまるという感覚であった。私はこれを表の音・裏の音という表し方をして来たが、この様な感覚で多くの演奏を眺めてみると正にこれら二種類の音が或いはねじれ、或いはからみ、複雑にゆれ動きながら進行していく様子が一幅の絵の様な感覚で迫り、格調高い芸術的な表現を形づくっているのが手に取るように脳裡に投影されて来たのである。

漸く音への感覚が醸成されて来るにつれて、それらを吹奏楽器を通じて表現するテクニックへの追求へ向かったが、これは前期の感覚醸成に比して勝るとも劣らぬ奈落への途であった。積んでは崩し、崩しては積むという数年の苦闘の末、私は漸く本質的な点を見落している事に気付いた。それは学校以来教わり、見聞きしていた音楽認識、わけでも用語に対する盲信であった。この事は機会があれば後で述べる事にするが、先ず吹奏楽という言葉より連想される数々の盲点に象徴されるもので、吹奏という言葉から吹く、吹くというから口で息を吹き込む、息を吹き込むという意識から必然的に生じる息の持続感覚の欠除など、吹奏という言葉は何と罪深い行為なのであろうか。それは丁度根本である元素の間違いに気がつかず千年以上にもわたって幻の錬金術に明け暮れた人間の業にも似て、いかにもやりきれない思いがしたものである。

ともあれ“吹く”という根本の意味に漸く眼の向いた私は、奏法と音の関係をつぶさに観察し、その間に一定の相関関係の存在する事に気づいた。即ち強く前向きに息を送れば表の音が、息を矯める様に共鳴的に吹けば裏の音が出て来る事が漸く分かって来たのである。（発声でいえば表声とうら声との関係に似ているというべきか。）同時にひびきや殺しの感覚も次第に身につくと共に、音質や音色についても認識が深まり、次第に合奏感覚へと助長されて行ったのである。

3. 音の融合

さて音に対する感覚の醸成と共に、音づくりが呼吸法と密接な関係のあることが漸くわかって来るに伴い、次に私を悩ましたのは音の融合の問題であった。これは吹奏楽演奏を試みた人ならば誰でもぶつかる大きな壁であると思うが、所謂ピッチに象徴される音合わせの問題が、大きく私の上ののしかかって来ていたのである。殊に生徒のバンドでは折角ピッチを合わせても、次の音に移行する場合、必然的に音程に眼がいくが、一これはこれとして大切な要素ではあるが一如何にしっかりと音合わせをしても、演奏となると泣くことの多い幾多の経験から、音合わせにはピッチ以外に別の要素がからんでいるという感覚が次第に芽生えて来たのである。

私はこの打開策として三和音程度の簡単な和音に何度も挑戦したのであるが、どうしても音の融合がしっくりいかず、悶々とした日々を送っているうち、ふと音は生きものであることを忘却しているのに気がついた。即ち音楽表現のレベルでは実に様々な音が駆使されているのに、ピッチの場合には全くこの事に考慮を払わず、固定的な音程感にとらわれていたことに気がついたのである。

この感覚で音を眺めてみると、音には色々な表現形態があり、その中でも音質が音の融合に対する殆んど決定的な要素を占めていることが分かって来たので、更に細かく観察をつづけるうちに音は大別して次の4つの要素があることを知ったのである。

①音形 ②音量 ③音質 ④音色、即ち①の音形は、タッチ及び音の持続形態によって形づけられるもので、釘型・箱型・ペナント型などその形は様々であり、②の音量は音の重厚さを左右するものでfやpをはじめ、ダイナミック性と不可分の関係にあり、また③の音質は固さ・柔らかさ・明るさ。暗さなど実に色々な表現を示す、極めて大切な要素であって更に④の音色はその配分によって芸術表現の華を形づくるということが結論的に得られたのであった。

私はこれを墨絵と油絵の表現になぞらえたが、1つの楽器（或

いは同種の楽器)の表現は①から③の駆使による同色の美しさであり、異種の楽器による演奏形態はそこに④の音色を導入する油絵の美しさであると思ったのである。

さて昔の多様性についての感覚が深まると共に、同種の音を出すテクニックの追求へと向かうのであるが、その事は前述の呼吸法だけでは不十分である為色々と考えているうちに、ふと映画における雨のシーンが頭に浮かんで来た。即ち映画においては雨の降る場面が数多く出て来るが、それはホースの先の指加減一つで小雨・大雨など実に様々な雨を降らせる高度な技術に支えられているものであって、水はあくまで元から流れていくものであり、様々な変化は指先の細かいテクニックで生ずるということに思い及んだことから、呼吸はあくまで腹から……。様々な音はアンブッシュなどの使いわけによって……という図式が私の中に密着していったのである。

ともあれ音合わせは、ピッチのみではなく音質や音量が極めて大きなウエイトを占めていることを理解した私は、次第に複雑な音づくりへと向かうことが出来、次なる音の配合感覚へと進んでいくことになるのである。

4. 音の配合

音の配合についての確信が深まるにつれ、次いで私の関心をそそいだのは音の配合の問題であった。その糸口となったのは合奏における音の処理、とりわけ和声的表現に関する経験であった。即ち合奏における音の融合は極めて大切なものではあったがこれだけでは今一つ決め手に欠け、融合を完全に行えば行う程気の抜けたビールのような演奏になる事実が気がついたのである。はじめこの欠点は音の多さに関係があるものと思い、音量のバランスのみに意を用い、或るセクションを必要以上に大きく演奏させたり、或る部分を故意に休ませたりする等様々な方法を試みたが何れもその結果は不満足な連続であり、又教育的に見ても問題をはらんでいた。そこで私は改めて虚心に帰り、色々の演奏を研究するうちにふと異質の音を使うことによりこの問題が解決されないかと思いはじめ、色々として行錯誤を重ねた末、音の配合感覚が極めて大切であることに気がついた。その結果

①音を浮きだたせたい場合は表の音質を使う。

②逆に音を目立たなくする為には裏の音質にする。

という二つの基本的感覚が醸成されて来たのである。分ってみれば何とやら、結局音の融合と逆の事をやればよいわけで自分の馬鹿さ加減に思わず苦笑したものである。ただこれはあくまで基本的感覚であり、実際の処理に当たっては質の程度や量的面の配慮をするもので、丁度料理の味つけがスパイス等の単なる組み合わせのみでなくその使い方と量の関係が大きく左右するものであることを付言しておきたい。

5. 表現への途

以上述べて来た様に音への問題が深まるにつれこれ等を応用してみたが、音に関しては或程度の満足が得られた反面、演奏全体についてみると今一つ心に訴えるものがなく何となく冴えないのである。この不満にずっと以前から感じていたもの、処々方々で聴く吹奏楽演奏は一口にいえば高い平均台の上でかろうじてバランスを保っている様な誠に不安定の域を出ない状態で、これを単なるプレーヤーの未熟だけにおしつけるのは問題の核心をついていない思いにかられていた。そこで現在の吹奏楽関係者の視点がどこに注がれているかを知る為コンクール評や講習などの内容をつぶさに検討した結果、例えば楽器に音の出し方、ブレス、バランスなどのその殆んどが部分面のみ集中され、マーチの特徴、クラシックの表現など音楽上からの意見の乏しい事に気がついた。即ち極端な言い方をすれば吹奏楽の追求はあっても音楽の追求はうすく、その表現は管弦楽などの模倣で事足れりとする姿勢がその主流である事を感じたのである。これは私にとっては誠に淋しい事であった。私は吹奏楽といえども音楽からはなれる事はあり得なく、その為には吹奏楽としての独自の表現を形造らなければならないと信じていたので、この風潮は私を次第に孤独の淵におしやることになった。(私がコンクールへの熱を次第に失って行ったのはこの事が大きな原因の一つとなっている。)悟道の言葉として「上手と名人は天地ほどの隔りがある。上手は馬を走らせ名人は馬に走らせる」というのがあるが、この示唆に基づき私は「吹奏楽を演奏する姿勢を改め、吹奏楽で演奏する。」ことを目標に表現への途を模索することになるのである。

6. 表現に対する問題意識

さて、表現への途を志して見たが、表現とは何か(？)、芸術的表現に迫るにはどうすればよいか(？)など基本的な問題が蔽の様に私の前に立ちたかり、解明に迫る具体的方途が仲々つかめず今までも増した困惑が私を包んで動かなかった。そして追及すればする程眼の前に空々漠々とした世界が次々と現われ、今までの様な観察を整理し帰納的に理解するやり方は、ここでは殆んど無力

にも等しい思いが私を焦燥に駆りたてたのであった。

そこで私は初心にかえり色々と思案をつづけるうちに、表現の理解には豊かな感覚の醸成が極めて大切であり、それも今までの様な対応感覚でなく全体でも言おうか、即ち一種の悟りの世界に入ることはないかと次第に思うようになって来たのである。

然しながらこの悟りの世界とは一体どの様な世界なのか、又どうすればそこに到達出来るか、など宇宙の謎にも似た課題が私をおしつぶすのであった。そこで空と象、無と有、虚と実、陰と陽など全く相反する要素が混然同居し、秩序があって秩序が無く、時に現われ時にかくれ、天衣無縫、変幻自在、千変萬化、全くもってつかまえどころの無い不可解な世界が広がっている様に私には思えた。

然したた茫然としているだけでは問題が解決する筈はなし、やがて私は昔の名僧の修業や知識・思索のルーツを求めてその方面の読書をする傍ら、登山や囲碁などの実践面を通してこの峻しい途を昇りはじめている自分を見出していた。それと共に今までの蓄積を今一度表現上の観点から洗い直し、改めて理解認識することに努め、感覚的なさとりに到達する手がかりとした結果、今まで見逃していた多くの事が認識され見方を変えて私の脳裡に投影されて来たのである。

7. 楽譜に対する再認識

さて感覚的なさとりの具体的なとりかかりとして私は先ず楽譜をどう読み、音楽とどう連動させて理解するかという面に力を入れはじめた。何故ならば我々が演奏する場合はその殆どが楽譜に頼る外は無く、音楽的感覚と視覚的楽譜との間の空間を埋めないでは到底表現に迫れる筈はないと思したからである。

その結果多くの事について新しい観点からの認識が得られると共に「表現」に対する具体的な感覚と技法が次第に会得されることになった。若干について述べてみたい。

(1) 用語に対する再認識

楽譜には多くの記号や用語が用いられているが、その表示の単なる鵜呑みだけでは音楽的表現など到底出来ない場合が多い。例えば最も初歩的と思われる休止符の概念にしてもこれを「休み」と速断し勝ちであるが、音楽的にみてもこれを「曲の休み」と解釈し得る場合は殆んど見つからない。大抵は曲・進行上における「間」の表示であったり、曲想の変化や転換の手段であったり、緊迫や弛緩など内面的な表現の場であったりすることが多い。この意味から見るとむしろ、休止符、という表示は不相当であり、無音符(音の出ない進行符)とでも表示した方が間違いが少ないと思われ用語の使い方の大切なことがしみじみと痛感されたものである。

(2) 表現記号に対する再認識

楽譜では表現に対する様々な表示がなされている。然しそれらを顔面通りにとらえてみても豊かな表現は仲々得られない。何故ならば表現の中味には心情的なものが多く内在して居り、これらの理解なくしては到底それらを表す事が出来ないからである。その為には表示の裏にかくされた心を読みとる必要があり、柔軟な感受性と思考の培いが絶対不可欠な要素として十分認識されなければならないと思われるものである。例えば悲しみと一口にいっても、悲哀、哀愁・悲痛・傷心・痛恨など様々な内容があり、それらを曲の中から如何に読みとり、これを表すかというレベルで解釈し表現することが肝要ではあるまいか。

(3) 表現テクニックに対する認識

さて心や感覚の培いと共に絶対必要なのは表現上のテクニックであろう。何故ならばそれら内面的なものは表現の場を通る以外に一般に認識されることはあり得ないからである。その為には音楽上用いられている様な作法を理解するその用い方について十分訓練しておく必要がある。然しながらそれらを単発的に用いたり、単なる組み合わせを行ったりするだけでは決して芸術的表現など出来得ない。前述の様な心に立脚しつつ、表現上の技法を総合的に駆使する事によってはじめて豊かな表現が出来るものと思われるのである。この点現在の吹奏楽界の視点は余りにもテクニックに走りすぎているのではないか。現代科学の粋を集めても決して昔の銘刀と同じ物が出来ない事実は単なる分析や合成だけでは問題が解決し得ない事を示して余りあるものとするべきであろう。

◇終わりに◇

「吹奏楽でクラシックを…」

表現への理解が深まるにつれて私の目標は再びクラシックの追究へと向かうのである。若い時代夢にまで見たこの難題に立ち向った私は漸く独自の方策を開拓するのであるが、これについては別の機会にゆずり今回は一応の終結とした。思えば吹奏楽にとり組んで40余年！、今では殆どの曲種についての理解が深まり、中高生位でかなり高度な表現テクニックを短時間に会得させる方途も開拓し得た。顧みて感無量である。



吹鳴創刊号 昭和46年4月創刊



吹鳴2号 昭和47年4月発行



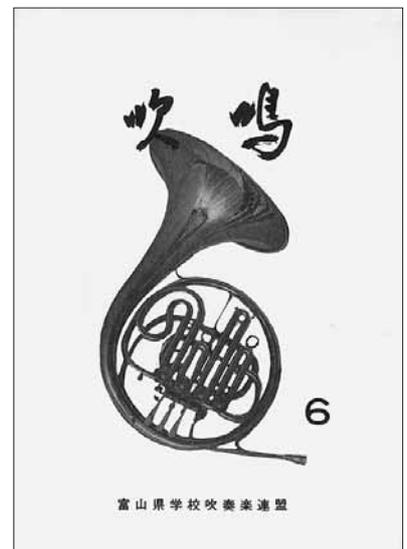
吹鳴3号 昭和48年4月発行



吹鳴4号 昭和49年6月発行



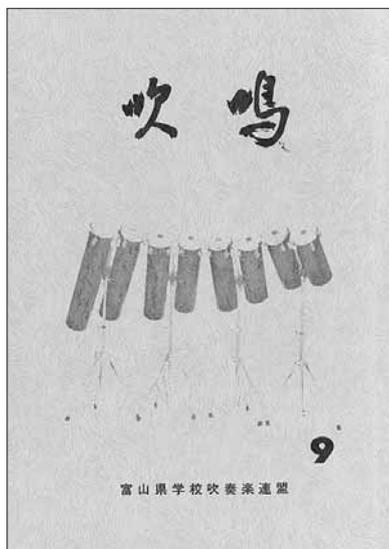
吹鳴5号 昭和50年5月発行



吹鳴6号 昭和51年5月発行



吹鳴7号 昭和52年5月発行



吹鳴9号 昭和54年5月発行

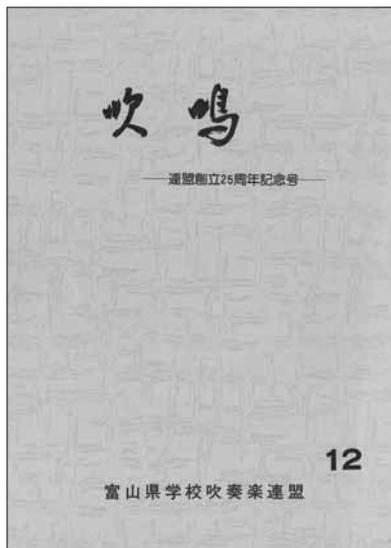


吹鳴10号 昭和55年5月発行

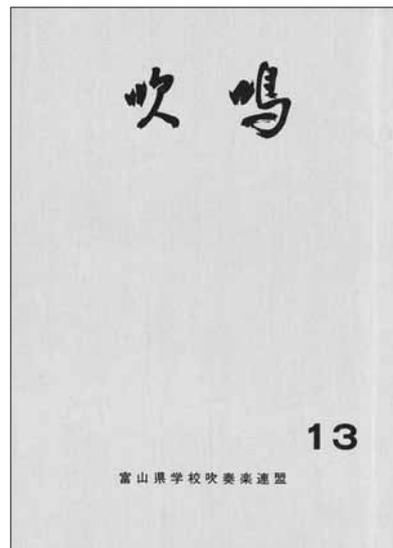
※ 8号は8Pに記載



吹鳴11号 昭和56年7月発行



吹鳴12号 昭和57年5月発行



吹鳴13号 昭和58年7月発行



吹鳴14号 昭和59年9月発行



吹鳴16号 平成元年3月発行



吹鳴17号 平成2年3月発行



吹鳴18号 平成3年1月発行



吹鳴19号 平成4年3月発行



吹鳴20号 平成5年3月発行

※15号は8Pに記載



吹鳴21号 平成6年6月発行

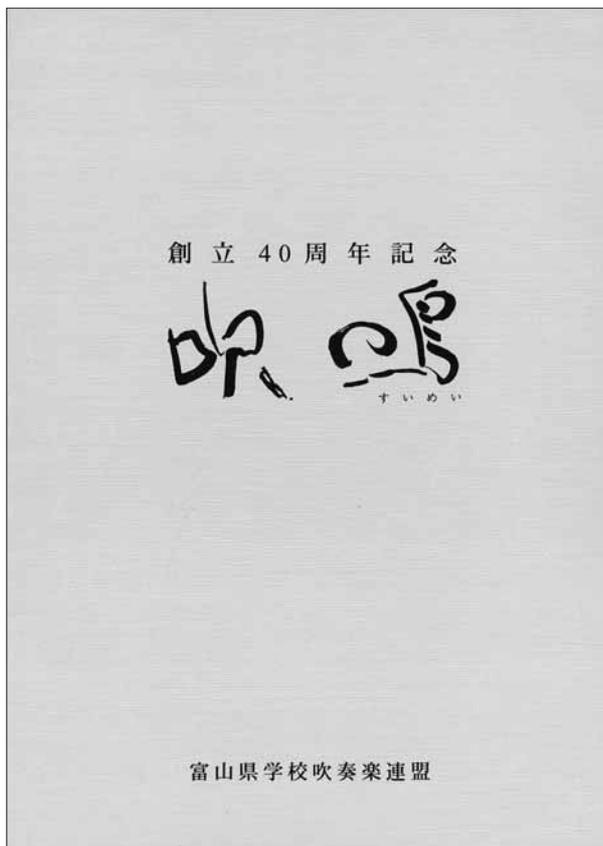


吹鳴22号 平成8年3月発行

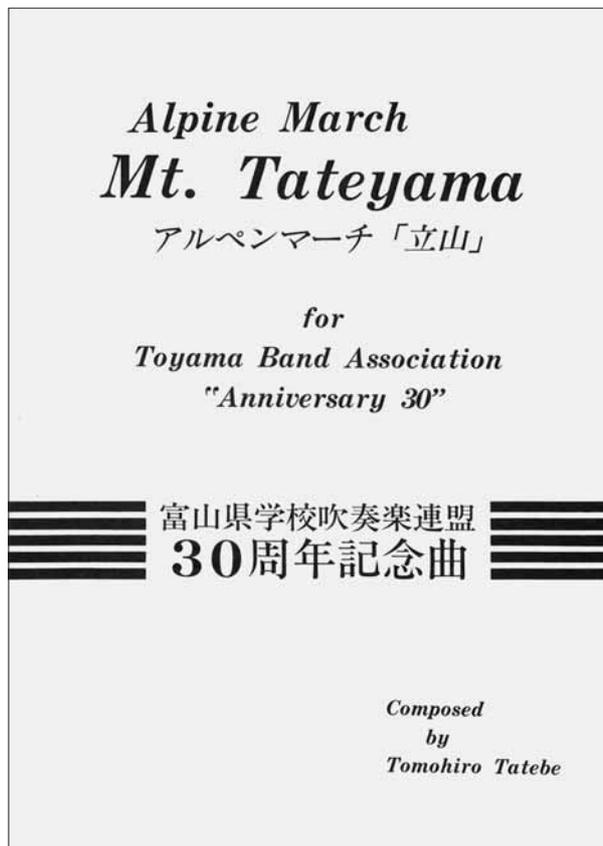
※吹鳴16号からの題字は富山県学校吹奏楽連盟名誉会員根井尚一氏による。

「吹鳴」の外題は右記の詩にイメージをつけたものである。すがすがしい、純真無垢な心を、音楽を通して培いたいと常に思っている。心のハーモニーを大切にしたいものです。 吹鳴創刊時編集委員 加藤 淳

「秋の祈」 高村光太郎
 秋は唳唳と空に鳴り
 空は水色、鳥が飛び
 魂いなき
 清浄の水こころに流れ
 こころ眼をあけ
 童子となる



富山県学校吹奏楽連盟創立40周年記念「吹鳴」23号 平成9年12月発行



富山県学校吹奏楽連盟創立30周年記念曲 アルペンマーチ「立山」 建部 知弘 作曲